

私はこのスイスチームのアテンドという仕事をやり切ったことによってとても多くのものを得らえたように感じている。私が行っていた主な業務は、スイス選手が安全・安心にトレーニングができるように、ゾーニングや学内ループで選手のランニングに付き添って一般学生との接触の防ぐことなどさまざまであった。私はこのスイスチームのアテンドを始めるにあたって、世界のトップ選手が来るのだからと、出来るだけのプロ意識をもって全力で取り組みたいと考えた。全日程動けるようにし、普段切っているスマホの通知も着け、英語の練習もし、最大限の準備をして臨んだ。

最初のマウンテンバイクの選手をサポートする一週間は、なかなか自分自身がアテンド業務の中心となれず、もっと選手とコース決めの話に参加したいと思うこともあった。自分の力不足を認め、コースの見張り役に徹していた。自分の立っていたポイントにまったく選手が来ず、ただ筑波山の奥地で 4 時間待ち続け、自分のスタッフとしての必要性を問うたときもあったが、後になり、「この時にちゃんと業務を全うしたからこそ、陸上選手が来た時に重要な役割を任せていただけたのかな」と感じられた。

日程も後半になり、陸上選手が入ってきてからは主に選手がループを走るときの付き添いをする仕事のリーダーを任せてもらった。学内ループにおけるスタッフ配置を考えたり、選手と自転車や自走したりと、非常に楽しく仕事をさせてもらった。密にコミュニケーションをとれたため、長距離選手と仲良くもなれ、非常に貴重な体験をさせていただいた。

私はこの 3 週間を通して、「報（告）、連（絡）、相（談）」の重要さや、どんな仕事もきちんとやっていれば重要な仕事を任せてもらえること、通常で考えられないことが起こる現場で働く楽しさなど様々なことを身にしみて感じる事ができた。またオリンピック選手と深くかかわるという人生の中で二度とないような経験ができたことが非常にうれしく、誇りに感じられる。

そして何よりも、この 3 週間をともに乗り切ったアテンドスタッフの皆さんがとても力のあつていい人たちばかりで、そのような人たちとつながりを持ち一緒に働くことができたということが自分にとっての 1 番の財産であり、皆様には本当に深く感謝したい。このアテンドを行ったことによって 3 週間でとても成長することができ、これを行うという選択をして本当に良かったと思っている。最後にこのような機会を与えていただき、この期間に関わっていただいた皆様、本当にありがとうございました。

体育専門学群 3 年

まず、新型コロナウイルスの流行により東京オリンピックの開催自体が議論される中でも、陸上競技部、つくば市役所の方々、アテンドスタッフ、スイスチーム等あらゆる組織、人の協力があったからこそ、感染者を出すことなく、スイス選手をオリンピックへ送り出せたと思います。私もアテンドスタッフの一員として貢献できたことを誇りに感じます。このような貴重な経験をさせてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

私がアテンド業務を終えて感じたことは二つあります。一つは私自身にとって「スポーツを支える」ことが生きがいに繋がるということです。私はこれまでスポーツには、「行う」とことと「見る」ことを中心に関わってきました。今回初めてオリンピックという大きなスポーツイベントにおいて「支える」という経験をしましたが、アテンド期間中は本当に毎日が楽しく充実していました。

選手の安全を確保し練習をサポートする、選手やコーチと英語でコミュニケーションを取り要望に応えるなど、一つひとつの業務が新鮮でやりがいを感じられ、またそれをスイスチームに感謝されることで「やってよかったな」と幸せな気持ちになりました。選手は自身のトレーニングに集中できていたのではないかと思いますので、選手とアテンドスタッフの間で win-win の関係性が構築できていたと思います。

二つ目は新たなオリンピックの価値を見出せたということです。私はアテンドを実施して、スイスチームの選手やコーチとの交流を通してスイスという国やそこに住む人たちに好意を持つようになり、オリンピックのいかなる競技でスイスの選手を見つけると自然と応援していました。このようにオリンピックもパラリンピックも、今までは関心もなかった国と交流し、友好的関係を築くことができる機会を与えるというメリットも持つと気づきました。各地に様々な国の選手が事前キャンプを行ったと思います。その選手たちを歓迎するそれぞれの地域にとっては、その国や選手と交流を深め、応援するというだけで東京 2020 大会がかけがえのない思い出として刻まれていくのではないかと感じます。また、ここで生まれた関係性（スイスとつくば市等）が様々な分野において発展していくことを望んでいます。

今回のアテンドを通してオリンピックに対する興味がより深まり、また「支える」活動にもっと携わっていきたいと強く感じました。このような経験ができたことに感謝し、この経験を一つのステップとして 3 年後のパリ 2024 大会やその他の競技大会で貢献活動ができるよう日々勉強や行動に励みたいと思います。

体育専門学群 2 年

今回、アテンドスタッフとしてさまざまな経験ができたことをとても誇りに思います。私はスイス代表の柔道選手に会うのがとても楽しみでした。一方で、私は英語が好きですが、実践で英語を使った経験がなく、うまくコミュニケーションがとれるのかとても不安でした。しかし、いざサポートが始まると不安は吹き飛びました。他のスタッフと協力してコミュニケーションをとったり、選手たちとも上手くコミュニケーションをとることができ、とても充実したアテンド業務になりました。

選手たちがランニングや柔道の稽古をしたり、ウェイトトレーニングする中で、同年代ということもあり大学のシステムやどのようなことを学んでいて将来は何になりたいのかなどについて話す機会がありました。その中で、文化的な違いはありましたが、「スポーツに携わる者」という共通項を見つけられたことをうれしく思いました。日本で発祥した「柔道」が、今では“Judo”としてスイスなど世界中の人たちに愛されていることも実感できました。今回のアテンド業務を通じて、まったく異なった言語を話し、まったく異なったバックグラウンドを持つ人たちとつながり、交流ができたことはとても幸運だと思いました。

現在の厳しいコロナ禍でのオリンピック開催には賛否両論ありましたが、私は開催して良かったと思いました。私自身がスポーツ選手であることから、暑い日も寒い日も、全力で練習をして力をつけ、試合に出るといことの大変さは理解しているつもりです。そのため、惜しくもオリンピック出場は果たせなかったけれども、練習相手として来日していた選手の方々が選手村へ入れないことからつくばでの事前キャンプを終えてスイスへ帰らないと行けないという状況は、とても辛く感じました。しかし、そのような状況下でも、練習相手として来た選手たちは、筑波大学での練習の最終日に、「また日本に来てください。今度は一緒に練習しましょう」と声をかけると、笑顔で応えてくれました。日本に来て代表選手の稽古の相手をしたことが、彼らにとって将来につながる刺激になったと信じています。私はいつか、また選手たちと筑波大学の柔道場で再開できる日を心待ちにしています。

また、アテンド業務は私にとってもう一つ大きな意味がありました。それは、スタッフの人たちとの出会いです。私は、新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた年に大学に入学したため、大学で授業を受けることはほとんどなく、大学生としての実感があまりわからない上に、大学の新しい交友関係も築けないままこの1年半を過ごしてきました。しかし、この業務を通してさまざまな運動部や、所属の人たちに出会うことができ、自分の知らない世界をたくさん知ることが出来ました。私は大学院への進学を考えていましたが、スタッフの中には大学院生の方など年上の方がたくさんいたので、取り組んだプロジェクトや研究などについて聞くことができ、自分の将来に関してより深く考えるととてもいい機会になりました。数日間でしたが、とても貴重で光栄な仕事に関わることができ、思い出深い夏休みになりました。今回学んだことをこれから活かしていきたいと思います。

体育専門学群 4 年

「自国でのオリンピック開催に何かしらの形で関わり、支えたい」という思いから、アテンドスタッフに関わることを決意しました。英語を思い通り話せず、外国の方とほとんどコミュニケーションをしたことのない私にとって、事前キャンプ前は不安でいっぱいでしたが、アテンド業務を行う中で、スイスチームとの信頼感が増し、充実感・達成感を日々感じることができました。一生、忘れることのできない経験となりました。

今回のことが、こうした素晴らしい経験となったのは、「役に立ちたい」という一心で一所懸命行動し、その結果スイスチームから「Thank you」といった言葉をもらえたからだと思います。また、最終日にスイスチームをほかのアテンドスタッフと一緒に見送った際に、「スイスチームの一員になれた」と思えるほどの一体感を感じたことが非常に印象に残っています。そして、このように関わりを持つことのできた選手の試合をテレビで見たときには、いつも以上に緊張・興奮・感動をし、「こんな素晴らしい選手の支えられて良かった」と思うことができました。今後もスイス選手たちを応援し続けていきたいと思っています。

アテンド業務を通して、語学力が向上できたとは決して言えません。実際に聞き取れないことや伝えることができなかったことが多々ありました。しかし、失敗を恐れずコミュニケーションをしていく姿勢は身につきました。これは、私が今まで行ってきた語学学習では学ぶことのできないものでした。これから生きていく中で英語を用いてコミュニケーションをする場面が必ずあります。その際、まずは伝えたいことをきれいな英語で伝えようとするのではなく、ジェスチャーを使ってでもなんとか伝えるというスタンスを大切にしたいと思っています。今回の経験をきっかけに自分の言語能力を磨いていきたいと思うようになりました。

英語に自信がなく、また不安定な情勢や時間の制約でオリンピックのボランティアやバイトに応募する決心がつかずにいる中で、今回ゼミの先生が本業務を紹介してくださったのがきっかけで、スイスチームのアテンドに参加することになりました。

実際参加してみて、当たり前ではありますが、ただでさえ選手たちは大きな大会前で最後の調整に来ており、フレキシブルな対応を求められるのに加えて、新型コロナウイルスの感染者を絶対出さないように、どんなに選手がたくさん走ろうが帯同したり、いたる所を消毒したり、暑い中でも常にマスクを着けていなければならなかったり、コロナがあるからこそ気を遣わなければならない部分が多かったです。また、本来であれば選手と一緒に外出するなどしてコミュニケーションがもっと活発にとれたであろう機会であったので、コロナがない状態でこのような業務に携わりたかったと思う場面もしばしばありました。スイスの選手もそれは同じだったと思います。

しかし、選手がのびのび練習してくれている様子を見るのが何より誇らしく、つたない英語しか話せない私にたくさん「Thank you!」と声をかけてくださるのが何よりのやりがいでした。五輪開催に懐疑的な国民も多く、飲食店の営業時短や、多くのイベント中止があるのに、「なぜオリンピックだけやるのか」という批判の声もやまないなかでの五輪開催でしたが、私はアテンドに実際携わってオリンピックを開催した意義は大きいと思いました。多くの人が国内にいながら国際交流の場をもてたでしょうし、頑張ってオリンピックを成功させようという思いは日本のホスピタリティを通じて選手たちみんなに伝わっているというのを肌で感じたからです。

また個人的には、普通に過ごしていれば関わることのなかったであろう修士・博士の方々や、専門性を十全に発揮してくれた部活動所属の学生と接点を持てたこともとても嬉しかったです。早く打ち上げがかなって、また皆さんのお話を聞きたいと思っています。このような貴重な機会を頂けたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

1 年延期の末に開催できた東京オリンピック。いつものオリンピックと比較して新型コロナウイルス感染拡大への懸念から批判の声も多く、不安な状況下でしたが、スポーツファンの 1 人として事前キャンプに関われたことを嬉しく思います。

今年は東京でオリンピックが開催されるにもかかわらず、正直なところ他国開催の時より盛り上がりが少なかったように思えます。テレビ観戦を余儀なくされ、さらにはその観戦を友達と一緒にすることもできない、そんなさみしい状況でした。しかし、この事前キャンプを通して、オリンピック選手が練習する姿を生で間近で見ることができたため、本番のテレビ放映では練習していた姿を想起させつつ臨場感を感じながら応援することができました。

今回、アテンドに興味を持ったきっかけは「オリンピックを自分の良い思い出にしたい」という理由からでした。新型コロナウイルスの影響で一年半近く自粛生活を余儀なくしており、このままではせっかく日本で開催されたオリンピックの思い出が、自粛生活そのものに成り代わってしまうと考えていました。そんな時に部活の顧問の先生から声をかけていただき、オリンピックを明るい思い出にするチャンスだと考え、立候補させていただきました。研究の実験の時期と重なってしまい、多くの時間お手伝いすることはできませんでしたが、それでも大会に向けて練習・調整していく選手の姿を見て、各国の選手の成果発表の場であり、なおかつ様々な種目が同時期に開催される唯一無二のオリンピックに関わることができてよかったな、と素直に思いました。感染対策に気を使いながらのアテンドでしたが、選手の方もフレンドリーで心が温まりました。

私たちに貴重な体験をさせてくださった、つくば市職員の皆様、OPOP 職員の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

体育系研究員

今回のスイスチームへのサポートは、ほかのスタッフとの協力が欠かせない業務だったため、楽しさと同時に難しさも感じた。というのも、私はこれまで個人でプレーする体操をしてきたため、自分の中だけで物事を完結してしまうことに慣れていて、しかし、今回は、陸上部や柔道部に所属するスタッフや、英語が堪能なスタッフと協力して、暑さ対策の中で感染症対策など難しい業務を遂行できた。他者との協力があったからこそ達成できたことが多々あった。結果的には、スイスチームをコロナ禍という状況下でも、最大限のサポートできたと思う。今後も様々な人と協力しながら、研究に、仕事に励んでいこうと思った。

また、アテンド業務を行う中で、国を代表して来日したスイス選手と交流できたことは、一競技者として、とてもいい経験になった。スイス選手は全員が複数の言語を話すことができ、文化の違いを肌で感じることもできた。しかし、自分の語学力の乏しさから、思うように意思疎通ができずに、もどかしさを感じることもあった。今後は、外国語でも滞りなく意思疎通ができるように、地に足をつけて語学力を向上させたい。

一方で、今回のサポートでは、感染症対策のため、スイス選手と「2メートル以内には近づかない」などの制限はあったが、陸上の中長距離選手が学内ループで練習する際に、自転車で付き添って安全確保をするなど、与えられた業務を着実に実行できた。総じて、今回のアテンド業務で、大学に入学以来、持ち続けてきた「国際的なスポーツイベントに関わりたい」という思いが少し実現できたと思う。

最後になるが、一刻も早く、このようなコロナ禍の状況が解消され、スイス選手など海外選手らが再度、来校した際には、語学力を向上させた上で、他者と協力して、よりきめ細やかなサポートを実現したい。

スイスチームの選手たちは、何に対しても全力でまっすぐに取り組んでいた。「こんな人に自分もなりたい」と、心から思えたアテンドスタッフとしての日々だった。

このスイスチームのサポートの話を受ける前は、東京 2020 大会はどこか他人事だった。新型コロナウイルスによる影響で、私自身の地元・東京で開催されるオリンピック・パラリンピックにも関わらず、心の底から楽しめるかどうかという不安があった。実際、私たちは日常的な行動さえ制限され、オリンピックは無観客開催で、選手たちを会場で応援できないとされていた。選手たちも声援を受けられず、本来の「観客と選手の鼓動が一体化する」という感覚は味わえない大会になるはずで、私の心は東京 2020 大会から離れつつあった。

そのような心境で始めたのが、スイス選手たちへのサポートだった。スイスチームと関わる中で気づいたのが、何事にもまっすぐに全力で取り組む選手の姿だった。本当は、自国のプライドや国民からのプレッシャーを背負い、競技することに恐怖や不安を抱えていたであろう。しかし、そのような姿は私の目には一切、映らなかった。

ある選手がその秘訣を教えてくれた。「全力でトレーニングをすると同時に、全力で遊び、休む。体と心のバランスを取ることが大事だよ」。今の私に足りないものだと感じた。「笑顔は何よりも大事なものだよ」とも教えてくれた。全力でまっすぐに、そして笑顔を忘れずに、取り組むこと。コロナ禍で世の中が暗いムードの中、ひたすらに夢へと突き進む選手たちの姿を間近で見ることができた私は、本当に幸運だった。

東京 2020 大会を楽しみにする理由ができ、テレビに向かってスイス選手を全力で応援した！何よりこれからの人生を生きていく上で大切なことを教わった。今回の事前キャンプにアテンドスタッフとして関われたことに、チームメンバーや運営スタッフに心から感謝したい。本当にありがとうございました。